

本尊

人を呪う心

甲「先生、お久しうございます。お達者で結構でございます。」

乙「やあ、お変わりはありませんか。早く来ましたね。まあおよりなさい。」

甲「お邪魔でございませうが、お聞かせくださいませ。」

乙「お妹さんは？」

甲「二人いつしよには出られませんが、妹は留守しています。母はこのごろ病気で

長浜の家に帰っていますので、こちらは二人きりですから。」

乙「何か聞きたいことがあるのですか。」

甲「先生、昨年夏聞かしていただきまして、一時はありがとうございましたが、近ごろまた何だか暗くなりまして、それに私は、どうしても、人の世が呪わしくなったり、よく腹が立ってならないのです。」

乙「何ですか？ 人を呪う……………」

自己を見失えるもの

乙「あなたは何歳になります。」

甲「二十七歳になります。」

乙「背髄はもういいですか。」

甲「背髄はよくなりましたが、やはり心臓が悪いので……………」

乙「あなたが世を呪い、人を呪いたい心にもなるのには同情できる。しかしはたしてそれが許されたことであろうか。それは如来に生きる者としては、あまりに高慢すぎる。如来の前にもっと、はっきり自己を清算しようてはないか。それはあなたが、あなた自身の腹の掃除が行き届いていないのだ。世をすねたり呪ったりする心で、すぐに如来の心を知ることにはできない。如来を真に知らずしては、自分自身の相はわからない、如来を見失い、自分自身を見失っているのがあなたの相である。」

大悲の心

乙「あなたは、煩惱のささやきを真実と思っている。しかし、あなたの胸に巢食う貪欲は、この世の幸福を追い求めようとする。幸福であるのが当然だと思っている。その心がさらに、不幸は受け取るまいとする。今あなたの態度は、あなた自身のなせることに對する責任すら背負うまいとする。あなたを苦しめるものは、あなた自身である。あなたよりほかにあなたを苦しめる者はいない。あなたの不幸はあなたが播いたものである。しかるにあなたは、あなたの幸福の方面は忘れて、不幸の方面ばかり数えて呪うと言う。はたしてそれがあなたに許されてあることか。」

（彼女の頭はだんだんと下ってゆく。）

乙「如来大悲を憶念しようてはないか。寂靜の樂より生死の苦海に神通応化したもう大悲は、一切衆生の罪も悪も苦も、おん身御一人の責任と感じたまい、一切の責任を如来一人のみ胸に、一人の責任として、若不生者と誓いたもうのである。如来は

一切群生の苦惱を一人の苦となし、一人の責任と荷負したもうのに、あなたは、あなた一人の苦惱すら負いきろうとせず、かえって世を呪い、人を呪おうとする。あなたにはあなた一人の責任をふりすてる………。」

（彼女は畳に手をついてうなだれている。）

御本尊

乙「責任！ 責任を感じる所に統一が生まれる。如来の心臓こそ、宇宙の統一者であり、したがって群生の帰依所である。畏れ多いことではあるが、上御一人は、『罪あればわれをとがめよ天津神 民はわが身の生みし子なれば』と下八千万の国民の罪悪をすら、上御一人の責任とお引受け下さつてあるではないか。そこに、日本国体の尊さがあり、国民の幸福があり、国家の真の統一が精神的になされるのである。上御一人の大御心が国民一人一人のうちに仰がるるところに、そこに真の国民としての生活が生まれる。」

私は先月、山口県共和支部に行つた時、美弥郡大嶺村城ヶ原小学校の阿部校長の殉職美談を聞いた。校長が、夜、何事かの音を聞き戸を開けて見れば、程近きわが学校は火につつまれていてはないか。校長は直ちに走つて学校に行き、中央部の職員室、すでに火につつまれた中に飛びこんだが、そのままついでに出て来なかつた。焼け落ちて後、灰の始末の時、廊下あたりにその白骨と化せる校長が発見せられた。はたして校長は、ご真影を奉持していられたであろうか。それとも空手であつたか。それはたいへんな疑問とされていたが、白骨の下からは、蝶番が二箇発²見せられた、ご真影を奉置し奉る箱のそれであつた。村民たちは思わず万歳を叫んだそうである。火の中をくぐつても護りつづけねばならぬものを持ちたてまつる国である。国民はただに法律や文句や規約に統一されないで、聖徳をおつて統治されるのである。

私は小さい時、いつも父から聞かされた。さあ火事という時にはだれでも気のついた者が、いちばん先に仏壇のみ仏様をお供して出ることだと。私は今ごろになつてこれを思い出してありがたく思っている。家財道具や着物や金銀よりも、いちばん先にみ仏を護りたてまつれ。そこに具体的な宗教生活があるのである。あなたのお生活はどうなつていのかね。私どもはこの三日間、この浄久寺のご本尊さまのお光に生かされ、心豊かに養われるのである。この寺の皆さま、そしてご先祖の方々が拜まれて生かされなかつたご本尊である。あなたはあなたのご本尊と、はたして毎日深い仏凡一体、機法一体の生活を成就してあるであろうか。もつと具体的に、あなたの家は、仏壇中心に整えられているだろうか。私は、先日、本部を出発する前、家内にそして本部員によく言つておいた。本部のみ仏さま、ご本尊をお大切にお給仕してくれ。一度お仏飯や、お花をお供えするのでも生けるみ仏にお供えするのだ。貧女の一燈ではあつても、み仏を拝み、み仏に仕える幸な身にしていただいたことを思つて、心からお仕えし礼拝しなくてはならない。単なる絵像、木像としていけるのでは、仏教はただ話になる。あなたは、あなたの家のご本尊に対して、どうしている。ご本尊のご説法が毎日聞かれるか。どうです。」

甲「まことにお恥ずかしいことです。あいすみません。」

生活

乙「あなたは体が弱い。それは不幸である。しかしそれゆえに、大無量寿經の説法が聞かれるではないか。親鸞聖人のみ教えが聞かれるではないか。ほんとうには、み仏の教えをただ一度でも聞かされ、久遠のみ親に会わしていただいたものは、どんなに不幸でも、不平は申し上げられないはずである。釈尊は、何のために泣きたまいしか。聖人は何を求めたまいしか、何を喜びたまいしか。人生の真意義はどこにあるのか。五欲中心の生活では、何一つ不足がなくなつても、これでいいとは言わないであろう。真実の教えは必ずあなたを、不幸だと思つた谷底から、私こそ最第一の幸せ者でございましたと、人生を真に肯定せしめるであろう。」

（彼女は頭をたれて合掌念仏して聞いている。）

「傲慢か、懺悔か。それはちょうど子どもが喜ぶ、『ぎつとんぼつたん』みたようなものである。人間に慚愧、懺悔の相が無くなつた刹那、必ずはね上つて、傲慢な心が出てくる。ほんとうは、あなた一人が生きていることは、四方八方へ対してあいすまぬことではないのか。人を呪う心、それはずいぶんと高上りした心である。呪うどころか、あいすまないのではないか。『ぎつとんぼつたん』の真ん中に柱に立つて『私は別に悪いとも善いとも思いません』と言つていることすら、実はまだ自己の見方が足りないのだ。その時にはまだ、味気ない心、砂をかむような生活、腹の中に何かつかえたような心がするであろう。大悲のみ心にかえつて、もつとはつきりお念仏申せ。」

甲「先生！何という私の高上りでございましょう。まつたくあいすまぬ私でありました。」

乙「今日から、朝夕二回の仏前のお勤めに本気になりなさい。心から花を、お仏飯をお供えなさい。そして、み仏の勅命に帰して生活なさい。仏前の勤行の延長が、一日中の生活でなくてはならないのです。店で仕事するのにも、その心でなさい。あなたは、この年月このお寺のご本尊様の前でお説法を聞きつつも、ただ単に木像として殺していたのです。本堂に行つておわびしてお出でなさい。お礼を申し上げて来なさい。」（彼女は立つて、本堂にゆく。静かにお念仏の声が聞こえる。しばらくして帰つて来た。）

乙「どうでした。み仏は何と言われましたか。」

甲「お恥ずかしくて頭が上げられませんでした。まことに今日まであいすまぬ生活をいたしてきました。四方八方へあいすまぬやつでしたのに。ご恩のほどしみじみ感じさせられます。」

乙「家に帰つたら、仏前に合掌なさい。仏前に坐つた時が、いちばん心のおちつくあたりがたい時です。」

甲「長い間お手間をとりました。それでは失礼いたします。また昼席に参詣させていただきます。」

乙「昼はどちらかね。妹さんは。」

甲「店をしめて二人とも参ります。ありがとうございます。」
乙「さよなら。」